

資料

周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇 (3)

小川利康編

承前

前号に引き続き、本号では一九四二年より四四年までの書信を掲載する。

途中一九四一年は書信の往還が途絶えた。これは松枝茂夫が『瓜豆集』（創元社）の刊行後、一九四〇年から四年にかけて、『紅樓夢』（岩波文庫）の翻訳に没頭していたためと思われる。『紅樓夢』は第一冊、第二冊を一九四〇年に、第三冊を一九四一年に刊行した後、戦時中の紙不足を理由に頓挫を余儀なくされ、翻訳再開は戦後を待たねばならなかった。

一九四二年の久方ぶりの書信には、一九三〇年の長期留学以来、十一年ぶりに実現する中国旅行の計画を周作人に知らせるものだった。この年の二月から三月にかけて、松枝は上海を経由して紹興に入り、南京、濟南を周遊した後、北京で周作人や俞平伯を訪ねた。当時の旅行の様子は『松枝茂夫文集』第二卷所収「聞書」紹興、魯迅、

そして周作人」でも触れられている。

表記・体裁については前号の方針を踏襲し、原文表記を尊重しつつも、読みやすさを考慮し、原文にない記号（鉤括弧などのいわゆる約物）を加え、日中間で異なる記号も可能な限り統一するよう改めた。

今回も飯倉照平先生（東京都立大学名誉教授）に校閲を仰いだ。ここに記して謝意を表したい。なお、戦前篇は本号で完結するが、次号は戦後篇を掲載する。

戦前篇（合計周四十四通／松枝二十一通、合計六十五通<sup>(1)</sup>）

- ・一九三六年（周四通／松枝五通） 「文化論集」三〇号
- ・一九三七年（周三通／松枝一通）
- ・一九三八年（周五通）
- ・一九三九年（周五通）
- ・一九四〇年（周十三通／松枝七通） 「文化論集」三一号
- ・一九四二年（周三通／松枝二通）
- ・一九四三年（周八通／松枝四通）
- ・一九四四年（周三通／松枝二通） 本号

一九四二年

19420121M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓

大へんく長いこと御無沙汰いたしてしましましたので、どこからどう書いてよろしいやらわかりません。たしか『藥堂語録』を頂戴して、その御札の手紙を差上げるのを怠つて以来かと思ひます。いつもくその事を念頭に置いて忘れたことはなかつたので御座いますが、長くなればなる程、益々書きにくくなって、とうく今日に到つた始末で御座ります。一官半職をうれば人間かうも駄目になるものかと、つくく考へる日も御座います。今更の詫びのいたし様もない事ですが、長々失礼申上げし段、何卒々々、御許し下さいます様、くれくも御願申上げる次第で御座います。

さて小生は近々のうちに先生にお目にかゝる日の来ることを思つて胸の躍るのを禁じえない気持で、この頃暮して居ります。長い間待ちのぞんでゐた支那旅行の願ひが漸くのことでかなへられ、二月の末（もうあと一と月しかありません）に當地を出發して海を渡ります。上海、杭州、南京を見て北上し、御地に入るのは、多分三月半ば過ぎ頃かと存じます。出来ることなら、會稽山を一目なりとも見たいものと熱望して居りますが、それは此際到底かなはぬ事でしょうか。学校へは「支那文壇の現状」といふような好加減な研究題目を書いて届けてありますが、小生としては實はたゞく先生に親しく御會ひして、お話を伺ふ外に目的は御座いません。昭和九年、山水楼で一度お目

にかゝつたこと<sup>(3)</sup>があるわけで御座いますけれども、席が大へん遠く離れて居りましたので、非常に物足りない感じを抱いて今日までゐた次第です。近いうちにその永年の渴望を醫すことの出来るのを何よりも嬉しく思ひます。今は仕事にも手が附かぬやうな気持で御座います。けれども又はじめてお會ひするのが恐ろしいやうな気がいたします。大方先生の前へ出たら自分の思つてゐること言ひたひことも何も言へないのではないかといふやうな気がいたします。私は筆の上では何でもなく平気で書けるやうな事さへ、面と向つて口ではなんにも言へないといふやうな情けない性質を持つて居りますので、先生にお會ひすることを永い間夢想し、近々いよいよその日が来るときまつたのを喜ぶ一方に、そのやうな危惧をいただくのです。去年先生が東京にいらした時<sup>(4)</sup>に小生も東京へお會ひするために行かうと思ひ、せめて門司までなりとも出ようと考へたのですが、さう思つただけで、とう／＼實行に移しえなかつたのは、専らさうした危惧に本づいたのです。今では大そうそれを後悔して居ります。それどころか先生に對しても非常な失礼を冒したのだと心から相済まぬ気持で居ります。今度こそ是非が非でも先生にお會ひしたいと思ひます。御迷惑でも何卒々々一度御引見お許し下さいませ願ひいたします。

北京滞在日数は多分十日か二週間位の豫定で御座います。四月六日から学校が始まりますので、その前に帰福せねばなりませんから。

御地は目下嚴寒の候で御座いませう。御身御大切にお過しの程、遙かに祈上げます。當地も中々寒く毎日つよい風が吹きすさんで居ります。

一月廿一日

松枝茂夫

周作人先生

## 19420201Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。接讀手書，得知月中將枉駕來江南再行北上，甚爲忻喜。唯恐文旌所至之地，文化荒落，別無可觀，難免失望。北京亦是同様情形，但幸尙有竹内君二三舊友<sup>(5)</sup>可以談話，寒齋雖敝陋，亦希望有機會得有一二次之聚會也。北京之印書館擬爲鄙人印一文集，因於近四五年所寫雜文中選取二十篇，定名爲『藥味集』，大約大駕抵北京時可以出版<sup>(6)</sup>，當以呈教。專此奉復，匆匆不盡，即上

松枝先生座右

二月一日 周作人白

## 19421119M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 長らく御無沙汰致しました。その後御変りもなく御過しの事と存じます。さきに御地に参りました折は過分の御歓待を蒙り誠に感激に堪へませんでした。たゞ親しく拝眉して聲咳に接しただけでも無上の光栄と存じて居りましたのに、歸るに際しては更に立派な御土産<sup>(7)</sup>まで頂戴致しました。それから又續いて新しい御著『藥味集』を御惠送下さいました。色々と頂戴するばかりで今迄つひに御札の手紙一本も差上げなかつた失禮は本當に何と申して御詫してよいやら分りません。いついつとてそれが気に懸らぬ日は無かつたので御座いますが一日延しに延すうち店頭いつしか半年も過ぎ去つて今日に到つてしまひました。今更かういふ御手紙を差上げるのが気が引けます。『藥味集』は學校で學生と一緒に讀む事にしてゐます。そのうちには翻譯させて頂きたいと存じ、岩波書店あたりに話をつけつ、ありますが、未だその方は決りません。實は學校で「周作人研究」と題する講義といふ程の大層なもの

では勿論御座いませんが、先生の思想文章に就いて小生の理解する限りのことを、この十月初から一週二時間づつ、話して居ります。その合間々々に『藥味集』を讀んで、一年間續けようといふ計畫です。實はそれを機會に先生の全著書を精しく讀み返してみやうといふ利己的な考に發したに過ぎませんが。分からぬ事ばかりで苦しんで居ります。又先月末、實業之日本社から先生の『藥堂語錄』を翻譯出版したいとの依頼を受けまして、翻譯從事中の處、此程大體の譯出を終りました。又々性懲りもなく誤譯だらけの拙い本を出して先生に眉をしかめさせる事かと恐縮してゐます。例の通り小生に讀めぬ箇所、多々有り、甚だ御多忙の先生に御迷惑をおかけして、申譯も御座いませんが、別紙列記の條々御教示願ひ度存じます。

それから『中國文學』誌上で已に御覽下さいました事と存じますが、「思痛記」の翻譯は大體終り、これから「雅片事略」に取懸らうと思つて居ります。「思痛記」の拙譯文に就いては方々小生に讀み取れぬ處があり、先生におたづねしようと思ひながら、急がれた爲にそのまゝ送つてしまひました。(三)(四)は殊に甚だしく、大抵は何とかコジツケましたけれども、そのコジツケさへ出来ないのが、三つ四つあつて弱りました。譯文全體について御教示下されば幸甚で御座います。

早くも冬が間近くなり、そろ／＼寒い時節に入ります。御地はもうすつかり冬でせうか。青空が美しい頃で御座いませう。目加田君<sup>(10)</sup>は近く南方から北へ向ふ筈ですが、この手紙が着く頃は北京でせうか。

週末の餘暇(金一月)を利用する爲、このころは毎週田舎(佐賀縣)へ仕事を持って逃避する事にして居ります。家では幼い子供(二男二女)が狭いところにウジャ／＼してゐまして、本一つおちついて讀むことが出来ません。今からそちらへ出張しようとしてゐるところで御座います。甚だ御面倒な願ひをいたしまして相済みませぬ。

御身體御大事に遙かに祈つて居ります。

松枝茂夫

周作人先生机下

十一月十九日

## 19421212Z 【周作人→松枝茂夫】

拜啓。手書讀悉。承下問各條，草率註就，有一二條須查書，而匆匆未能查出，如注乙，尙希原諒。『藥堂語錄』殊不值譯出，恐內容乾燥無味，對於外國讀者尤不甚適宜，雖承出版所好意，此點尙請考慮爲幸。近日俗務紛集，未能多寫，草草奉復，即上

松枝先生座右

十二月十二日 作人啓

\* 編者注記…以下の部分は松枝茂夫の質問の手紙（19421119M）に周作人が回答を直接書き込んだものである。以下は明朝が松枝茂夫、ゴチック文字を周作人で区別したが、判別に苦しむところもあったので、影印も併せて参照されたい。

## 藥堂語録序

一頁 那就爲得其中的一點常識。「ソノ中ノ…常識の爲の」

二頁 已經有三缺一、麻將ヲヤル時、三人ソモツテ、一人タケタリナイ(11)

〃 草頭郎中、漢法醫、民間療法ノ藪醫者、草頭藥、民間療法ノ藥草。

〃 做在糖裏的肉桂薄荷……。飴ノ中ニ入レテ「味ツツケル」肉桂…

瑣事閒錄

十四頁 故友燁齋 錢玄同

跨鶴吹笙譜

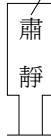
コレハ即チ頭牌也

十六頁 門陳「肅靜」「道台」「翰林」「布政」等朱牌。コレデ宜敷シキヤ

〃 曲房無阿，庶？ 無 不誤

アツマヤ  
四阿か

朱塗ニ金ノ文字



〃 頭牌執事。

執事は處簿、昔大名行列ニ先ニ行ク様ナモノ、頭牌は執事の中の一ツ、肅靜、  
迎避、及ビ頭銜(官名)等ヲ書イテアル高札ノ様ナモノ、但タテニ長イ。

如夢錄

十九頁 北關々王赴臨埧集賈泥馬 北關ノ關王(關帝)ガ臨埧(地名)ヘ泥馬ヲ買

存拙齋札疏<sup>(12)</sup>

二二「令人心疲」。嘔吐ヲ催サセル？俗語、「越諺」著者范寅在其日記中常用之。

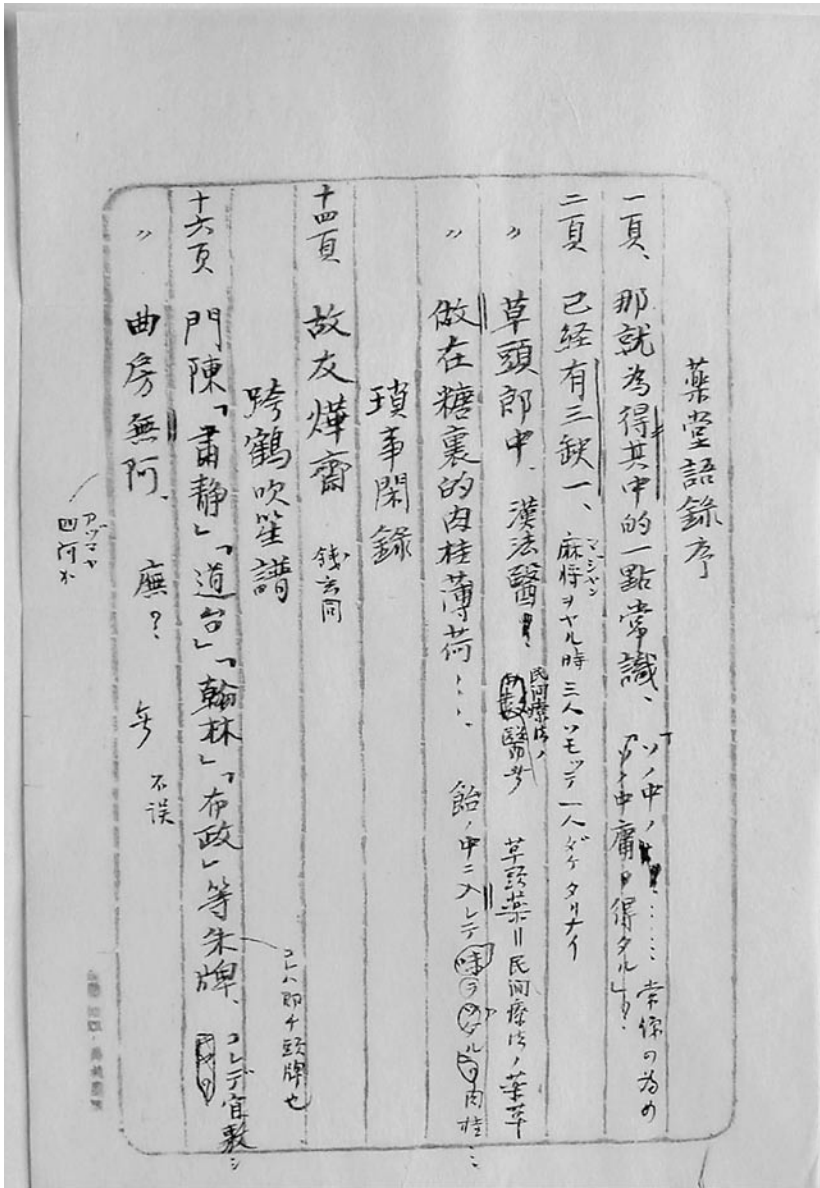
姚鏡塘集

二四頁「或病瑣窗幽」一案 見別紙注甲

〃 「一筐櫻桃先給予懷王」注乙

汴宋竹枝詞





周作人書簡 19421212Z1

頭牌教事

執るは頭牌。若大名行列ニ先ニ行ケモ、頭牌は格等ノ物ヲ、書付、四遊、及ビ頭牌等ヲ書ケル高札ノ様ナモ、

格ナ

肅靜

坐立三年ノ字

如夢錄

也及三字

十九頁

北關々王赴臨埴集買泥馬

北關々関王(關帝)カ臨埴(地名)へ泥馬ヲ買(埴)ニ

二二

令人心疲

嘔吐ヲ催サセル

俗語、世語等若此實存(在)記中常用ニ

姚鏡塘集

二四頁

或痕瑣窗幽

見別紙注中

〃

一筐櫻桃先給予懷王

注乙

芥菜竹枝詞

二六

但止乞頭

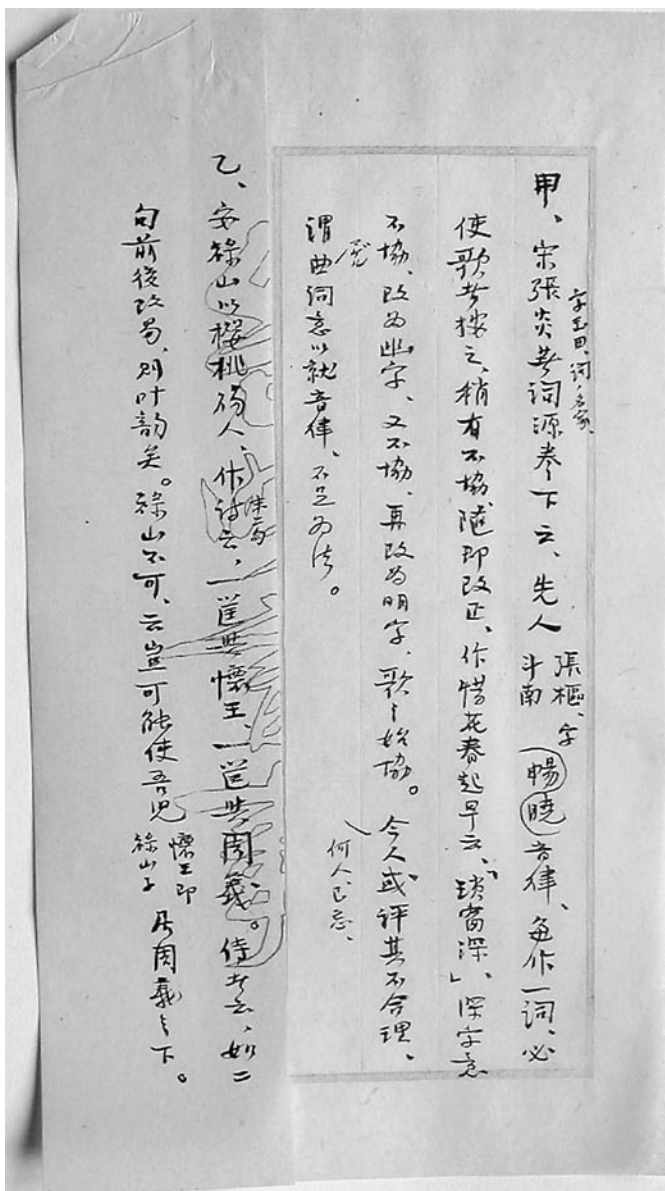
乞頭ヲモラフハカリカ、乞頭錢

博徒が博場主人ニシテ

二七

鹿渡蒼會錄

行鹿



周作人書簡 19421212Z3

二六 但止乞頭、タゞ「頭」ヲモラフバカリダ、頭<sub>博徒方博場主</sub> 頭錢<sub>人二納メル金</sub>

五祖肉身

二七 麗<sup>○</sup>瀟<sub>麗</sub>薈錄 麗

甲、宋張炎著「詞源」卷下云、「先人<sup>張樞</sup>曉暢音律，每作一詞，必使歌者按之，稍有不協，隨即改正。作「惜花

春起早」云，「瑣窗深」，「深」字意不協，改爲「幽」字，又不協，再改爲「明」字，歌之始協<sup>(13)</sup>。」今人或評其不

合理，謂曲詞意以就音律，不足爲法。

マゲル

乙、安祿山以櫻桃賜人，作詩云，「一筐與懷王，一筐與周贄<sup>(14)</sup>。侍者云，如二句前後改易，則叶韻矣。祿山不可，云

豈可能使吾兒<sub>懷王即祿山子</sub>居周贄之下。」

七修類稿

二九頁 人性有偏至。人二八極端<sub>アル方面</sub>ニ走ル性質アリ<sup>(14)</sup>。

麻團勝會

三七頁七行 大老官 大盡ノ事

三八 糝米爲團。コネルノ事ダラウ

張天翁

四四 不能歸在張道陵名下，算是他的新意匠者也。

不能カトシマヒマデ懸ルカ，他ハ張道陵ヲ指スカ？

洞靈小志

四五 與水竹村人 各集相似，水竹村人 徐世昌 各集 詩、文各種

洪幼懷

五〇頁 孔另境，ソノ著書？ 小説考證ノ様ナ書物，書名ハ忘レタ<sup>(15)</sup>

〃 良不愧爲名父之子 幼懷ノ父ハ誰デセウカ？ 洪北江 亮吉

藥酒

五一頁 至多茵陳酒氣色…… 茵陳，艾の類，燒酎ニ浸シテ藥酒ニナル

五二 爲什麼醫工之性……原文如此 昔醫師ヲ職人ト見タカラデシヨウ

落花生

五三頁 行枝如甕菜虎耳藤，枝ヲ匍ハシテ

宋瑣語

六四頁 而佛々遂乘其後，青泥地名デ敗竄，幾至匹馬隻輪。

佛々 赫連勃々，人名

晉末五胡ノ一，匈奴ノ族，敗義真，入長安，稱帝，國號夏，後爲魏所滅。

〃 義真獨逃草中，僅以身免，而關中百二仍化爲戎場矣。

宋高祖之子

關中地名 百二 百一ノ險，見『字源』P. 11101

秦，今陝西省

南園記

史彌遠 其時權相

六五頁 韓敗，臺詔及於放翁，不過以媚彌遠耳。臺ハ御史臺評ハ彈劾

六六頁 爾時雖不能懼思？ 懼思，憂ヒ思フ

澹齋文存

七五頁 老友覃公？ 沈兼士ノ事

兼ハ詩韻ニ十五聲十三聲ノ中ニアリ韻目ヲ以テ其韻ノ中字ヲ代ヘル事ハ古人（顧亭林ノ如キ）ノヨクスル事ナリ

武藏無山

八〇頁 千首萬世 千秋萬歲ノ音譯

“ 華蓋、” 若イ〈 同

“ 『寄譯通言』。書名，未見

錢名世序文

九〇頁 但只是許州官放火，原是自古如斯耳。兼燭談ニ二三ページ老學庵筆記ニ見ユ。

“ 養瘦馬 『陶庵夢憶』二見ユ，女ヲ訓練シテ、妾ニ賣ル事 瘦馬ヲ養フト云フ

“ 詞臣一詩時？頌揚，可謂泰山之微塵，亦似仰希朝悒

詞臣一詩為頌揚，可謂只是泰山上之一點微塵耳且亦以附和朝廷之意旨耳一篇ノ詩ヲ以テ

讀詩管見

九四頁 餅齋 玄同先生

“ 老鐵？ 趙蔭棠 現北京大學文學院教授

七修類稿

孔方南

三九夏

人性有偏至

人ニハ極端ニ走ル性質アリ

麻團勝會

三〇夏 七行

大老官

大盡ノ事

三八

糝米為團

コネルノ事タラウ

張天翁

四四

不能歸在張道陵名下

ハ不純

算是他的新意匠者也

不能ガ因リテ懸ルハ他ハ張道陵ヲ指ス事

洞靈小志

四五

與水竹村人各集相似

水竹村人ハ徐世昌

各集リ詩、文、各符

洪幼懷

五〇頁

孔另境、ソノ著書？

小説考證ノ指テ書物、書名ハ忘レタ

良不愧為名父之子

幼懷ノ父ハ誰デセラカ？

洪北江 亮吉

蔘酒

五一頁

至多茵陳酒氣色……

茵陳 女ノ類、燒酎ニ浸シテ蔘酒ニナル

五二

為什麼醫工之性……

原文如此 昔、醫師ヲ職人ト見タカラバテシヨク、

落花生

五三頁

行枝如獲柔虎耳藤

枝ヲ匂ハシテ

宋瑣語

六四頁

而佛々遂乘其後 青泥敗窟 後至匹馬隻輪

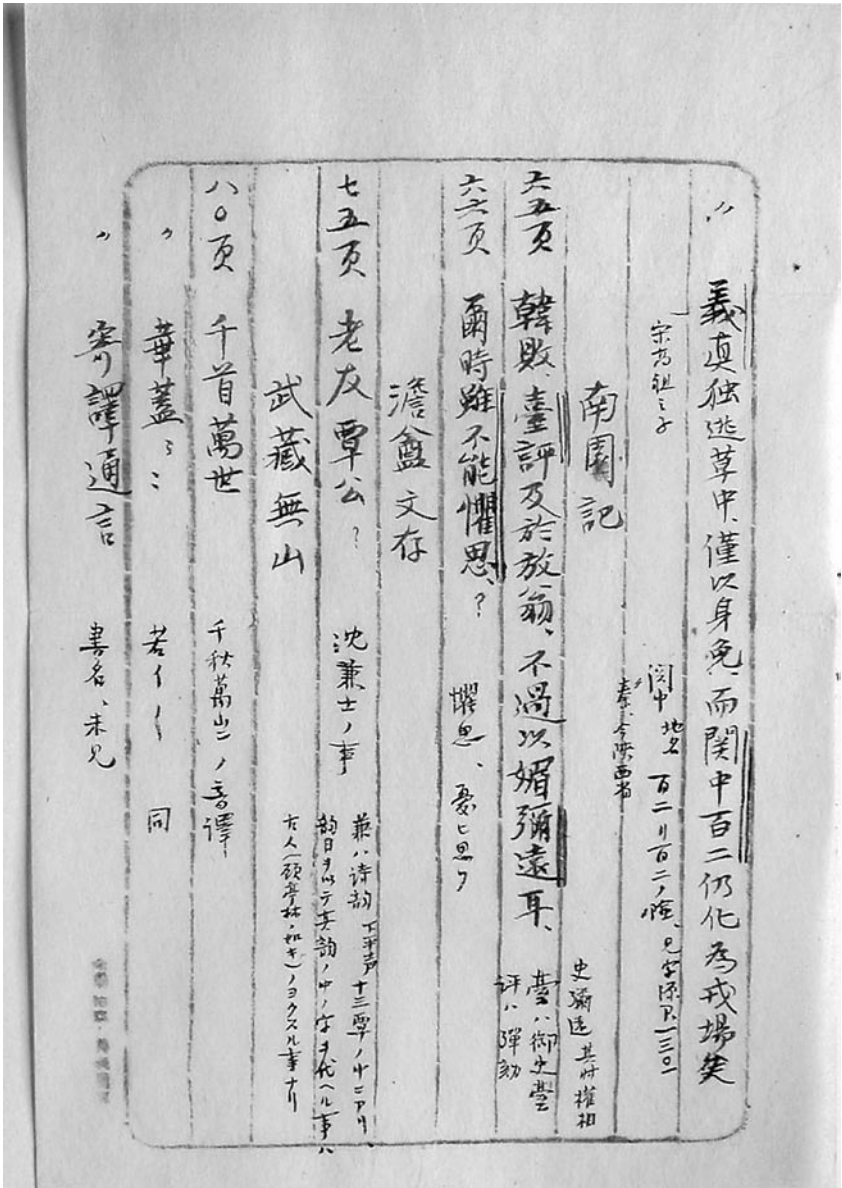
佛々ニ佛運動ノ人名

地名

晉末五胡ノ一、匈奴族、

以秦兵入其地、稱帝、國號夏、後ハ魏所滅、





周作人書簡 19421212Z6

錢名世序文

九〇頁、但只是許州官放火、原是自古如斯耳

兼懋德二三卷、  
老學菴筆記二見之、

養瘦馬

陶菴學懷二見之、

女ヲ訓傳シテ、  
五ホニ盡ル事、  
瘦馬ヲ春アトシテ

詞臣一詩頌揚、可謂泰山之微塵、亦似仰希朝愷、

詞臣一詩、  
頌揚、  
可謂以之泰山上、  
一点微塵耳、  
且七以附和朝廷、  
忘言耳、

讀詩管見

九四頁

餅齋

玄同先生の

老鐵?

趙蔭棠

現北京大学三子院教授

令人忍俊不禁

使人忍多何要發笑、

曾衍東

九七頁 絲總柳竿橋大乗、四圍雪上昆玉壺冰

絲總柳竿ノ大橋ニ乗ル意也

夜光珠

一〇三頁 蓋後世帝王已難該得起此宗珍寶

モツ寶格カナクナツタ

該得起 俗語、日モツ事カ出ル

中秋的月亮

一〇五頁 中秋供書月餅水菓及老南瓜 ウメノクマノ月餅、果物、大キノ南瓜也

一〇七 這也只是風雲之會、不過跑龍套罷了、

風雲ニ合、英雄カ時機ニ接シテ志ヲ達スルセ云フ、空際ニ三ノ三ノ一ノ一

跑龍套 舊劇ノ術名、大将カ登場カ寸前ニ四人ノ兵卒カ先ト出テ来テ

助例ニ立一事

〃 令人忍俊不禁 使人忍不住要發笑  
曾衍東詩<sup>(10)</sup>

九七頁 絲總椰竿轎大乘，四圍雪亮玉壺冰

絲總椰竿ノ大轎ニ乗ル意？

夜光珠

一〇三頁 蓋後世帝王已難該得起此宗珍寶

モツ資格ガナクナツタ 該得起（俗語） 〃モツ事ガデキル

中秋的月亮

一〇六頁 中秋供素月餅、水菓及老南瓜

物ノ入ラヌ月餅、果  
大キナ南瓜

一〇七 這也只是風雲之會，不過跑龍套罷了

風雲之會 英雄が時機に投じて志を達するを云ふ 『字源』二二〇三ページ

跑龍套 舊劇ノ術語 大将が登場する前に四人の兵卒が先に出て来て

兩側に立つ事

19421226Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。前承詢及櫻桃一筐賜與懷王之出典，一時未能想起，頃閱『唐人小説』，乃於「安祿山事跡」中找到，今特抄呈希察覽爲幸。此上

松枝先生左右 作人啓 十二月廿六日

〔史思明〕嘗欲以櫻桃賜其子朝義及周贄，以彩牒勅左右書之，曰「櫻桃一籠子，半赤一半黃，一半與懷王，一半與周贄」小吏龍譚進曰「請改爲一半與周贄，一半與懷王，則聲韻相協」思明曰「韻是何物，豈可以我兒在周贄之下」  
 「安祿山事跡」三卷，唐姚汝能撰，宣統元年，葉德輝刻入『唐人小說六種』中。

## 一九四三年

### 19430217Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。日前寄上近作小文小冊子想已蒙收入。頃見「思痛記」尊譯，有一二處就鄙見所及略加說明，今附呈，亦希察覽。前三次譯文匆匆閱過，未及留意，未知其中有無些小疑問，如蒙下問當場所知奉答也。草草不盡，即上

松枝先生座右

二月十七日 周作人啓

『中國文學』九十一，<sup>(17)</sup> ページ 290 痧，普通多指日射病，但弔脚痧則爲コレラ，紅斑痧爲猩紅熱

又 ページ 294 事，<sup>(18)</sup> 指施給米穀之事。非，與下文不能相接。親信連讀，意謂……の顯官でなく，又歸王の親信でなければ、

又 305<sup>(19)</sup> 廣文乃學官 民國以前、國立學校之教官 之別稱，正式名稱有教授，訓導，教諭三種。

19430224Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。四日手書至今日收到，可謂慢矣。承問各節今已註明送呈乞查收。『結緣豆』之名甚佳，但恐内容不相稱，未必有此力量，却煩費力譯出印行，得無有徒費之感耶。日前寄上小冊子亦只出於畏天憫人之意，大抵亦是徒費之一耳。匆々，上

松枝先生座右

二月二十四日 周作人

\* 編者注記…以下の部分は松枝茂夫の質問の手紙（散逸）に周作人が回答を直接書き込んだものである。以下は明朝が松枝茂夫、ゴチック文字を周作人で区別したが、判別に苦しむところもあったので、影印も併せて参照されたい。

賣糖<sup>(20)</sup> 喚嬌娘 小間物行商人のならず小さな錠<sup>かね</sup>。驚閨又は

喚嬌娘と云ふ、心は閨房の中の娘を呼び出す

如蕭老老公之荷荷 梁の武帝<sup>蕭衍</sup> 臺城に餓死する時、荷荷と叫んだ

「問話揚州」易家鉞著 揚州人の悪口を云ったため、問題をおこしたもの

撒豆 枯草熱 Hayfever之譯語、かれくさネツ。

場合によつて  
トウチにしてみよ

持念 念じよ

**賣糖** 喚嬌娘 小間物行商人のならぶの小さな錠、鈴書問等は喚嬌娘と云ふ、心は潤房の中の娘を呼ぶ出す

如蕭老老公之荷荷、梁の武帝 萬行 臺城に餓死する時、荷と云ふ

閒話揚州 易家餅茅、揚州人の悪口を言ったため問題をおこしたものの、

**撒豆** 枯草熟 エドモーター、イ俾後、かいくさネツ

**縁日** 鶴子花 ゲラニウウ (Geranium) のよ名俚、西洋草花

**模糊** 模糊、糊塗 ハドウ譯シタラ宜シイデセワカ、大マカ、ボンヤリ

**結縁豆** 洞裏火燒 火燒は此菜の焼餅の事、炉の中に入れて焼くから、洞裏火焼トラフ

我平常笑禪宗和尚那麽超脱、却還掛念臘月二十八、  
臘月二十八は大晦日の意味、佛教ではよく死ぬ時、死に際を臘月二十八にたとへる。

**高跡寺** 匏瓜厂主人 沈尹默の別稱、  
沈尹、前北京大學教授、又北平大學校長

縁日 鶴子花 ゲラニウム (Geranium) の意譯 西洋草花

模糊 模糊・糊塗ハドウ譯シタラ宜シイデセウカ、大マカ、ボンヤリ

(欄外書き込み…場合によってドウチにしてもよい)

結縁豆 洞裏火焼 火焼は北京の焼餅の事、爐の中に入れて焼くから、洞裏火焼ト云フ。

我平常笑禪宗和尚那麼超脱、却還掛念臘月二十八……

臘月二十八は大晦日の意味。佛教ではよく死ぬ時、死に際を臘月二十八にたとへて云ふ

(欄外書き込み…掛念 気にする)

禹跡寺 匏瓜廠主人 沈尹默の別號

詩人、前北京大學教授

又北平大學校長

19430316M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 先日は「中國の思想問題」を御送り下され、又一昨日は「思痛記」の拙譯の誤りにつき御教示賜り洵に御厚情有難く存じます。「思痛記」につきては御言葉に甘へて近々の中に澤山おたづねいたしたいと存じます。もつとも同書単行本の出版については、御承知の通りのいきさつがあつて、生活社の方では渋つて居るやうな状態で御座いますので、實現は困難かも知れませんが、竹内君が必ず本にすると云つて呉れるのですが、果してどうなりますか。凡て竹内君に委せて居ります。「中國の思想問題」は早速拜讀して非常な感銘を受けました。是非ともこれは廣く人々に讀ませる必要があると思ひ、例の大膽さで直ちに翻譯を試み、改造社に交渉しましたところ、昨日返事があつ



て、『改造』四月号に是非とも掲載いたしたしとの事で御座いました。文中二三、解しかねた處があります。

三頁九行、相人偶者謂人之偶之也、之ヲ人トシ之ヲ偶トスとよんで宜しいのでせうか、或は人ノ之ヲ偶トスル？  
 三頁六行、魯養爰居『章氏叢書』<sup>(24)</sup>が学校にないので、檢する事が出来ません。魚羊？ナド、故事ツケタリシテ  
 キマス。

七頁九行、松麩

何卒御教示賜り度う存じます。

相変らず生活に追はれて何一つ成し出でず、これで三十九にもなつて、二男二女の父であるかと、時々は顧て驚くと共に自ら赤面するのです。先日何年振りかで會つた友人から一向世帯やつれしてないのは感心だと、ほめられました。實は冷やかされたのかも知れませんが。まるでネンネエのやうに世の中の事が解らず、いまだに法國の小説に熱中し、『グリム童話集』を娘(十三歳)と引張り舐するやうな始末ですから、大方察せられませう。時々は本當に心から赤面します。いつになつたら——と心細く感じます。

昨年、支那旅行に出發したのが二月二十六日で、あれからもう一年たちました。全くぼやく／＼してゐる中に一年たつてしまひました。明日は雛祭とやらで、子供等が首の取れたお雛様を取出して並べてゐます。氣候も漸く春めいて參りました。御地の春はまだ大分おくれませうか。

三月二日 松枝茂夫

周先生 侍史

哭  
二伸

こちらの大学の学生 支那文学専攻、森一作といふのが、近く御地を訪れる由で、或は、先生をお訪ねいたすかも知れません。その折は何とぞ御引見下さいます様、御願申上げます。

三月十六日

宛名の書き方が間違つてゐた為、半月程帰郷中に三月二日に出した筈のこの手紙が戻つて参りました。

19430325Z 【周作人↓松枝茂夫】(電報<sup>25</sup>)

二四 ペキンセイゼウ 一〇一〇ヒ二五 セ一一、四〇

ロウニンタセニ一四五

マツエダ シゲヲ

ロコクガ エンキヨトイフトリヲカフニハトヨムシウ

セ九、三〇 一五九

19430326Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。手書誦悉。拙文又蒙譯出，甚爲感愧。承詢文句略解於下。

人之偶之也 人ノ之ヲ偶トスル。

魯養爰居 魯名國 ガ爰居名海鳥 ヲ養飼フト云フ意味。<sup>(26)</sup> 關於此句，因想『改造』即將出版，寄信恐遲誤，昨以電報奉聞，

因電文難解，由電報局來請求說明，未知於收到時有無查問，深恐返ッテ迷惑ヲカケテ甚爲歉仄

松麩 麩ハコガシ。松の葉ヲ粉ニシテ麥コガシノ様ナ，仙人ノ食フモノカト思フ

森君尙未見到，四月初旬，須往南京一行，至十五日以後方歸，或恐其時相左亦未可知。

草草不盡，即上

松枝先生台鑒 作人啓

三月廿六日

### 19430418M 【松枝茂夫↓周作人】

拝啓 電報二通、<sup>(27)</sup> 続いて玉翰誦誦、洵に恐縮の外御座いませんでした。すでに雑誌が出てしまった後で訂正する事が出来ず、折角の御厚情に相背き、本當に申譯もなく存じます。あまり早まって杜撰な譯稿を發表してしまひ、今にはじめぬ事乍ら慚愧の至りで御座います。お詫びの致し様もありません。雑誌はさきに一部お手許にお送り申上げました。すでに御覧下さいました事と存じます。「魯養爰居」はじめ珍譯も定めて多い事かと恐れます。『結縁豆』に収める際に訂正いたしたく、不安の處、何とぞ御教示下さいませ。おねがひいたします。「爰居」は當時『佩文韻府』など引繰り返して調べましたが終にわからず、あ、いふ滑稽な妙譯を捻り出しました。今になって『鑿禪

「畫適」の中に大雅蕪村を論じた中に、「商呂ノ爰居ヲ饗スルニ似テ驚カザルモノハナシ」といふ文を偶然見付け出し、喫驚いたしました。「商呂ノ爰居」とはどういふ意味でせうか。出典はいまだに検出し得ないで居ります。

『結縁豆』の草稿はすでに書店に送りました。内容ハ『藥堂語録』と外十三篇です。十三篇は前便にお知らせしました十五篇中より、「關於朱舜水」と「鴉片事略」の二つを省いたのです。「朱舜水」は是非入りたいと最初から豫定してゐたのですが、一二箇所、引用文の意味のわからぬのがありましたので、一つは枚数の都合もあつて省いたのでした。甚だ残念ですが、どうせ近い中に『藥味集』の翻譯に着手する考で居ますから、割愛する事にいたしました。

ところで茲に甚だ申し兼ねる一件で御座いますが、この『結縁豆』に先生の序文が頂けないだらうかと本屋の方で申すのです。十三篇を頭に持つて来て、後半が『藥堂語録』となるので、先生の総序が初めに有つたら非常によいと小生にも思はれます。甚だまづい且誤譯だらけの不十分な譯本に先生の序文をいたゞかうと考へるなど、まことにおこがましい限りと我ながら赤面を覚えます。本屋からその申出がありましたのは正月の初の事でしたが、延しくして今日に到つた次第です。極簡単なので結構で御座います。若願へましたら一筆書いて頂けませんでせうか。更にもう一つ『結縁豆』の題簽をお願ひしたいと存じます。表紙か扉に（或は両方）用ひたく、『瓜豆集』や『藥味集』の表紙は非常に好もしく思ひますから、是非御無心申上げたく、御多忙中の先生と重々存じ上げ乍ら勝手なお願ばかり申上げました。

本年は四月もすでに半を過ぎたといふのに、まだ寒う御座います。満開の櫻を霰が叩き落してしまふといふ途方もない奇景を見ました。櫻を見る逞もなすぎてしまひました。大陸もやはり時ならぬ寒さであると聞いてゐます。

南京は如何でしたでせうか。随分お久し振りでさぞかし感慨もお深かつた事と御察し申し上げます。そしてもう無

事に北京に御帰着になった頃でせうか。前便で一寸申上げました友人森君はまだ帰って参りませんが、間に合ひましたでせうか。

氣候不順の折柄、御自愛の程、ひとへに御祈り申し上げます。乱筆おゆるし下さい。

四月十八日 松枝茂夫

周作人先生

19430430Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓 惠翰誦悉、『結緣豆』知將付印、囑寫小序、本當應命、唯正值居喪、未能執筆、但題簽或可寫奉耳。爰居見於『爾雅』釋鳥中、魯養爰居之事見於『國語』之「魯語」。便以奉聞。匆匆不盡即上。

松枝先生座右

四月卅日 作人白

19430430Z 【周作人↓松枝茂夫】 訃音<sup>(29)</sup>

(表紙)

訃

幕設地安門外嘉興寺

(本文)

先母魯太夫人痛於民國三十二年四月二十二日

酉時壽終京寓距生於咸豐七年十一月十九日

戌時享壽八十七歲 作人 等隨侍在側親視含殮

擇日安葬茲定於五月二日設奠領帖哀此訃

聞

男 周

樹人 作人

建人

子婦

信子 朱安 芳子

孫男

豐一 豐二 海嬰

若子

孫女 静子

鞠子

孫婦 張莢芳

曾孫女 和子

19431014M 【松枝茂夫↓周作人】<sup>30)</sup>

拝啓 久しく御無沙汰申上げました。先般御母堂様御逝去の折は、ろく／＼御見舞の言葉さへ差上げず、甚だ申譯もなく存じて居ります。何と申上げてよいやらわからぬ儘にいつもその事を氣に懸けながら、いつしか時をすこし、今は益々申上げやうもなくなつてしまひました。禮をわきまへぬ振舞に對してさぞかし面白からず思つてゐられます事と察せられ、いよ／＼身の置きどころもない思ひでございます。今更御託びのしやうもありませんが、何とぞ／＼御許しの程願上げたうございます。北京に遊んだのは、ついこの間のやうな氣が致しますが、指折り數へてみると、もう一年半の昔と成りました。あれから随分と變つた事と存じます。

『結縁豆』は一應出来た譯稿を本屋に渡したのは今年の四月初旬の事でしたが、一部分の原稿が紛失したりした事件があつて（東京で）、再び前と多少企畫を變へて譯し直し、郵送したのは五月末の事でした。さうして

一昨日になって漸く校正が出初めました。さうしますと、前に質問しそくなってゐた疑の個所がいくつも出て来て  
 忽ち困つてしまつたわけでございます。

今度の『結縁豆』の内容は次の通りでございます。

結縁豆、縁日、撒豆、賣糖、浮世風呂、關於朱舜水、關於王翰、兒時的回憶、婦人之笑、老年、模糊、本色、日  
 本的落語、日本雜事詩、四鳴蟬、鴉片事略、燕京歲時記、禹跡寺、日本的再認識、中國的思想問題、

以上二十篇<sup>(31)</sup>に『藥堂語錄』を加へたものです。

扉の繪を私の小学時代の友達で今尚郷里有田に在つて焼物の繪をかいてゐる人に豆を描いて貰いました。若し題簽  
 の字を先生に書いていただけましたら、どんなにか有難いと存じますが、さう御願ひ出来ませうか。お忙がしいと  
 ころを又々甚だ無躰けな事ばかり申し上げ恐縮いたしますが、何卒下記の條々御教示下さいます様、伏して御願ひ  
 いたします。

遙かに御健康お祈り申し上げます。

松枝茂夫

周作人先生

19431022Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。十四日手書於今日接到。拙文承費神一再譯刊，且感且慚。下問各條附還，題字亦勉強塗抹，一併寄呈乞賜查  
 收。年來寫小文現已收集爲『藥堂雜文』，又將讀書雜記

如『藥堂語錄』中所收

百八十餘則編爲一冊，名『書房一角』，均託新

民印書館付印，但不知年内能否出版其一耳。匆匆，即請



松枝先生台鑒 作人啓 十月廿二日

\*編者注記…以下の部分は松枝茂夫の質問の手紙(19431014M)に周作人が回答を直接書き込んだものである。以下は明朝が松枝茂夫、ゴチック文字を周作人で区別した。

一、兒時的回憶 『苦竹雜記』一二六頁

七行目 患驚數晝夜驚は驚風、ヒキツケ

八行 刺雞冠、割羊尾、搓桑蠶モムトサカノ血、羊尾、死ンダ蠶漢方で僅、蠶と云ふ、皆天然痘の藥。

九行 毒食 天然痘を出させる爲、色々の毒食(トサカノ血など)を喰はせる

(欄外に記述…一名は發食、病氣を誘發し、又外へ引き出す効力あると云ふ)

〃 灌漿 ウンデ来た。漿はホウソウノ膿ウミノ事 天然痘はウンでくと助かるサウだ

十二行 天氣翻潮 シトツテ来る (入梅の時の事)

一二七頁二行 通關散 宝丹の様な藥、鼻に入れて嚏をさせる故、通關と云ふ

五行 病悔(悔氣、晦氣は運が悪い事) 運が悪って病氣多い

〃 既而成三陰瘡 二日おきのマラリヤ

八行 十四日身涼 熱がさめた

姓名

耳の中を剃る細い刀かと思ふ

〃 剃匠百有用攪刀割通而梳之 床屋の百有が攪刀をもって剃って通して梳をかけた

一名は餐食、  
病氣を憐れし、  
又外へ引かぬす  
効力甚しと云ふ

一、見時的回憶 苦竹雜記一三六頁

七行目 患驚數晝夜 驚は驚風、ヒキツケ

八行 刺雞冠、割羊尾、槌桑癭 トサカノ血、羊尾、死シテ槌野は時と云ふ

九行 毒食 五劫瘧を出させらるる色々の毒食(トサカノ血など)を食はせし、

灌漿 山シテ来た、怪川はホウノウノ膜ノ事、五劫瘧はウデノ

日 十二行 天氣翻潮 シトツテ来り、(入板の時の事)

一三七頁 通關散 宝丹の標を菜、鼻に入れて嚏をさせる故(通關と云ふ)

五行 病悔 (恠氣、晦氣は運が悪い事、)運が悪マ病氣をい、

既而成三陰瘧 二日おきのマラリヤ

二行 十四日身涼 熱がやめた

言まの  
洒落

剃匠百有用 攪刀割通而梳之

床坐のる有が攪刀をもて剃つて

九行 梳髮、其辮如鏡。

髪が毛がゆけり 辮髪は鏡の如く(細い)

關於朱澤水 華咭集 七頁

七頁 祇好州蘇作判通一詩

能日名詞を漢字にして、前篇にて翁仲を  
仲翁と云うた人を嘲ける狂詩、見よ、

八頁 若不知書主未出頭地耳

生字ノ頭か出ない、即乎生、

四鳴燐

未出頭、出せーむにかける

七八頁 吟邊燕語

林琴南譯書、Notes from Sakeyuan.

撒豆 一三二頁

秋にタイフンが来ると、何と果日ニて二る十日の標に一六  
の日にさめるのは昔からあつた向邊の仔跡である、

秋風漸涼、王女暴已過、果はありし、七月十日にきたる

辯護

婦人之笑 秉燭談 三三四頁末行

俞君好為婦人出脱

辯解

種片事略 風雨於一七九頁八行

埜里治 Wadlwich

外から脱出せるといふ

九行 脫髮，其辮如鑽 髮の毛がぬけて辮髮は鑽キリの如く〔細い〕  
關於朱舜水 『藥味集』

七頁 祇好州・蘇作判通一詩

態々名詞を逆にして、間違つて翁仲を  
仲翁と云つた人を嘲ける狂詩。見原文

（欄外に記述・言葉の洒落）

八頁 若不知書生未出頭地耳 生字，頭が出ない，即ち「生」，

未出頭，出世しないにかける

四鳴蟬

七八頁 『吟邊燕語』 林琴南譯書，原書即 Tales from Shakespeare

撒豆

一三二二頁

秋にタイフンが多く、何回暴と云つて、二百十日の様に一定の日にきめるのは昔からあつた海邊の傳承である <sup>(32)</sup>

秋風漸涼，王母暴已過。王母は西王母，暴はあらし，陰曆七月十八日にあたる

婦人之笑

『秉燭談』

二三四頁末行

俞君頗好爲婦人出脫 辯護，辯解

雅片事略

『風雨談』

一七九頁八行

塙里治 Woolwich。

咎から脱出させると云ふ意味

朱文恭公遺事一則

蘇州一知縣見翁仲，問

通判官名爲何物，通判誤對曰仲翁，知縣作詩嘲之曰，「翁仲緣何叫仲翁，只因書讀欠工夫，自然

難入林・翰院，祇好州・蘇作判通」

（朱君が門人達に話した笑話の一ツだと思ふ）

拝啓

19431207M 【松枝茂夫↓周作人】

先日は早速乍らわざわざ速達便を以て御返事の御手紙をいたゞき、又題簽を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。  
『結縁豆』はやうやく半分だけ再校を終へたところで御座います。三八〇頁程の本となる模様です。自らよみ返し  
ながら、又々文字通りの「拙譯」出現に顔のほてる思ひを致して居ります。今年内の出版は困難かと存じます。

尚これは先に一度申上げたかどうか存じませんが、先生の隨筆「模糊」をよんで郝懿行を小生も二三蒐集し、主として『筆録』から短章百篇を選譯して、名も『模糊集』と題して生活社から出版する事にいたしました。この夏脱稿したもので御座います。「中國文学叢書」の一になるわけですが、いつ本になるかは未だわかりません。

別便、戸川秋骨の本二冊、謹んで御送りいたします。「二萬六千哩」と「西詞餘情」、この間古本屋で發見いたしました。先生すでに御所蔵有之かとも存じましたが、兎も角、献上いたすつもりで、求めておきたるもので御座います。御晒納下されば有難いと存じます。漸く寒冷、御身御大切に祈上げます。 勿々

十二月七日

19431218Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。手書誦悉、又惠贈書籍二冊亦已收到、雅意甚感。秋骨先生著作寒齋所看者大都是隨筆論文之類、此二冊適無有、今承惠與、可補此缺。計出版時鄙人正在東京住湯島一帶下宿中、每晚徬徨於神田本郷書店間、今日繙此、感懷舊游、恍如目前、尤深今昔之感。看後面書目亦有多面善、如佐藤氏之小説集『楳』<sup>34</sup>、昔年亦曾有之、今則不知去向矣。

知選譯郝君隨筆甚善。此君性情見識均好，而文字亦樸實有味，尊譯已成，甚希望能早日出版。拙文亦編成二冊<sup>(35)</sup>，書店本云元旦可出，看現在情形似不能如約，或須延期矣。草草不盡，即請  
松枝先生惠鑒

十二月十八日 作人啓

## 一九四四年

19440306Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓。昨日由生活社寄來尊譯『模糊集』一冊，至為感謝。拙集雜文已出<sup>(36)</sup>，寄呈一冊，自愧所寫文章頗缺靜定，蓋傾於功利，不能安於閑適，念之悵悵。『書房一角』一卷皆是小文或較可觀，不久出版，當再寄奉。此請

松枝先生台鑒 周作人啓

三月六日

19440324M 【松枝茂夫↓周作人】

拜啓 又々久しく御無音に打過ぎまして、誠に申譯も御座いません。先に雜誌『日本研究』をいたゞき、今度は又『葉堂雜文』を頂戴に及び、有難く有難く早速拝讀させていたゞきました。どれもこれも面白くて堪りません。第

一分はもとよりさうですが、第二分の各章いづれも重要な文字と存じました。そのうちに又読み直して小生に解し得られぬ處を御教示に與りたう御座います。

小生は先月下旬以来、弟の結婚に引続き、家母六十六才の死に遭ひ、福岡と有田との間を幾往復し、全く寧日も御座いませんでした。休暇中はずつと有田に逗留して居りました。御禮状差上げるのが大変遅れまして恐縮で御座います。何卒御海恕願ひたう存じます。『模糊集』とは甚だ杜撰なものを拵へまして、恥かしく存じます。蕉葉白といふ事も知らず、「炒麵」を「やきそば」と訓したり、その他いろ／＼の誤譯を好意を持つてくれる人から教へられて且つ羞ぢ且つ喜んで居ります。それでもなほ方々譯者自身にもわかり兼ねる個所があるとは洵に罪の深いことで御座います。

『結縁豆』の方は三月下旬に上梓の由、本屋から申して参りて居りましたが、どうやらそれもむづかしく四月以降になる事と存じます。

今日から所用で京都まで参ります。このごろの旅行は米持参弁当持参で、たゞ苦痛のみ楽み少いもの、やむを得ません。

まづは簡単ながら御礼まで。もう間もなく御地は柳絮飛ぶ時節がまるる事でせう、御健康を祈り上げます。不一

三月廿四日 松枝茂夫

周作人先生

19440528Z 【周作人↓松枝茂夫】<sup>37</sup>

拜啓。昨天收到書店寄來『結縁豆』、共有五冊領收、多謝。拙文無多大意義、語錄短札、恐在外国讀者更不免感到

枯燥，幸得好譯，受益深矣。跋中承賜獎，殊不克當，但甚感盛意，亦以為榮幸。關於「思想問題」，鄙意頗為真摯，雖明知無用，覺得不能不一說，而讀者乃亦有以為偶者。如前年文學報國會中發表掃蕩反動作家之演說<sup>(38)</sup>，近經本人說明，所云反動根據即是「思想問題」一文，此在轉向文人或自可有此種看法，但亦頗出意外，可發一笑也。『書房一角』因印刷遲誤，須六月初纔能出版，當再呈教。匆匆不盡，即請

松枝先生台鑒

五月廿八日 作人啓

### 19440627M 【松枝茂夫↓周作人】

又々長い間御無沙汰いたしました。御変りはございませんか。小生もお蔭様にて、相変らず暢氣な独りぐらしを人から羨ましがられて居ります。過日ハ『兒女英雄傳』についての漫談（例によつてのんべんだらりの）を『文學研究』<sup>(39)</sup>に載せましたが、どうやら郵送がきかないのを残念に存じます。 六月廿六日

遙かに御健康を祈ります。

### 19441111Z 【周作人↓松枝茂夫】

拜啓，九月未得手書，因俗務繁多，久未奉復為歉。承示春波橋事，甚感佩。唐時之橋，因賀知章詩而得名者，當在城外，因『志』<sup>(40)</sup>明言「東南五里」。且詩所云又是「鑑湖之波」也。至於禹迹寺之橋，本不知何名，後人因放翁詩句，乃亦以「春波」名之。而放翁所云「春波」只是泛指，亦與賀詩無關也。近日在南京開文學者大會，鄙人疲於行旅，乃謝絕不去，甚為厚幸。目下華北文壇之歪氣甚惡。鄙人本非文人極想脫退。以此近半年來不再發表文章。偶寫隨筆，



只送與南方朋友掲載雜誌中耳。北京大學亦已得脫身，現在唯任綜合調查研究所副理事長。在一週中去二天，但如木炭車不來相接，則亦可以不去。殊爲閑散。頗思讀書，而新書難得，舊書又總是這一套，漸覺得氣悶。自恨不會學會吸紙煙，無消遣妙法也。匆匆即請

松枝先生台鑒 作人啓

十一、十一、

戦前篇 以上

注(1) 前号まで掲載した書信の数の一覧には誤りがあり、本号で全て訂正した。以下に訂正表を掲げる。

(誤)	一九四〇年	周十二通、松枝七通	(正)	一九四〇年	周十三通、松枝七通
	一九四二年	周三通、松枝三通		一九四二年	周三通、松枝二通
	一九四三年	周八通、松枝三通		一九四三年	周八通、松枝四通
	一九四四年	周二通、松枝三通		一九四四年	周三通、松枝二通

以上、お詫びして訂正する。従って、合計の書信の数も周作人四十四通、松枝二十一通、合計六十五通となった。

(2) 『葉堂語録』は一九四一年五月に刊行されたが、当該時期の書信はなく、散逸したものである。

(3) 周作人が一九三四年夏に日本を訪問した際、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫ら中国文学研究会の肝いりで、八月四日に日比谷の中華料理店山水楼にて周作人訪日の歓迎の宴が開かれた。松枝もそのメンバーの一人として参加したことを指す。

(4) 一九四一年四月六日より十九日まで、東亜文化協議会の代表団団長として、京都、東京を訪問した事を指す。当時、周作人はすでに湯爾和の後を襲って教育督弁に就任しており、その職務に連なるポストとして協議会の会長も務めていた。

(5) 復刻版『中国文学』(別巻)所収「年譜」(立間祥介編)によると、一九四二年四月、松枝は「上海で小野と会い、北京で竹内、飯塚らと会って周作人を訪問。竹内とともに俞平伯を訪問のち、華中旅行。」とある。『竹内好全集』(第十七卷、筑摩書房一九八二年刊)所収「年譜」(久米旺生編)によれば、竹内好は回教團研究所から派遣されて、二月十七日から四月末まで中国へ出張中だった。張家口、包頭、大同等を調査旅行する前後に北京に滞在し、三月後半は北京で松枝茂夫とも会い、月末に北京を共に発ち、徐州まで一緒に旅行している。その時の様子は「旅日記抄一、二、三、四」(『中国文学』八十五号、八十七号および八十九号、一九四二年七月、九月、十一月)に詳しい。当時、岡崎俊夫は新聞社勤務で、飯塚朗は留學で北京に滞在しており、何らかの形で竹内の訪中も周作人に伝えられていたようだ。

- (6) 『薬味集』は同年三月三十日刊行で、次の書信が述べるとおり、手渡すことは出来なかった。
- (7) この「御土産」とは李小池『思痛記』のことであったという(『思痛記・解説』『中国文学』八十七号)。
- (8) この企画は最終的には『薬堂語録』のほかに二十篇を追加する形で実現し、『結縁豆』と題して、一九四四年四月に實業之日本社より刊行された。
- (9) 『思痛記』は『中国文学』(八十七号)八十九号及び九十一号、一九四二年九月(十一月、一九四三年一月)に四回にわたって掲載された。太平天国の乱で九死に一生を得た体験記の翻訳で、文中に虐殺の描写が多く、残酷すぎると「當局からの注意」を受け、「不穏当な箇所は自発的に削った」(『中国文学』八十九号「後記」という。この後、同じ李小池による「鴉片事略」の訳載も計画していたようだが、『中国文学』が九二号で廃刊となって実現しなかった。当初は竹内好の強い勧めもあって同じく李小池の著になる「鴉片事略」と併せて一冊として刊行する予定であったようだ(『中国文学』八十五号巻末広告)。だが、結局は『思痛記』(寶雲社一九四七年十月刊)として単独で刊行された。
- (10) 当時、目加田誠は九州帝国大学教授。同じく九州帝国大学の助教授であった松枝茂夫にとっては直属の上司というべき関係にある。この年、昭和十七年十月から十二月まで、目加田は中国に研究出張中だった。(目加田誠博士古稀記念・中国文学論集・龍溪書舎一九七四年刊)
- (11) 「ソモツテ」は「ソロット」の筆誤であろう。
- (12) 原文にはないが、『薬堂語録』(庸報社、一九四一年五月刊)に基づいて、題名を補った。
- (13) 『詞源』からの引用には一部省略がある。
- (14) 書簡は「周義」と読めるが、正しくは後述の通り「周贄」となるため改めた。
- (15) 孔另境の著書とは『中国小説史料』(中華書局一九三六年刊)を指すものと思われる。このなかで「金瓶梅」関連史料として『寒花廬隨筆』(『薬堂語録』は『寒花齋隨筆』と誤記)が挙げられている。
- (16) 書信では「曾衍東」となっているが、『薬堂語録』に基づいて訂正した。
- (17) 『思痛記』(四)、『中国文学』九一号)の文中で松枝は『紗』といふのを、以下すべて霍亂と譯してしまっただが、正しくはどう譯すべきであらうか。
- (18) 前項と同様、訳文中で「以下三行の譯文には自信がない。恐らくは誤譯であらうか。原文は『雖事僅數日、使梁非偽顯官、又爲歸逆親、信必不能也』である。私には「事」「非」「親」の三字の意味をどう取るのが正しいかはつきりせぬ。それとも句讀が違つてゐるのであらうか。(譯者)」と注記に書き残しているのに答えるもの。
- (19) 文中で「廣文」を名前として訳していたのを訂正した。
- (20) 以下、「賣糖」「撒豆」「縁日」「禹跡寺」は『薬味集』(一九四二年三月刊)所収、「模糊」は『苦竹雜記』(一九三六年一月刊)所収、「結縁豆」は『瓜豆集』(一九三七年三月刊)所収の作品。
- (21) ゲラニウムとは今日のゼラニウムを指す。
- (22) 「ドウチ」とは「ドッチ」の意味であろう。
- (23) 「中国的思想問題」は『中和月刊』第四卷第一期(一九四三年一月)に掲載され、のちに『薬堂雜文』(新民印書館一九四四年一月刊)に収

- 録された。松枝の手になる訳文は文中で述べるとおり、『改造』（一九四三年四月号）に掲載された。なお、書信原文では『中國の思想問題』『思痛記』と二重カギ括弧で記しているが、いずれも単行本ではないので、通常のカギ括弧に改めた。
- (24) 章炳麟の著作を集めたもの。周作人は『中國の思想問題』で章炳麟『薊漢微言』を引用している。
- (25) 次の書信で述べるように、訂正が間に合わなくなることを恐れて出した電報。発信日付が定かでないが、昨日と次の手紙でも述べるので、二五日と判断した。電文は「魯國が爰居といふ鳥を飼うにはと読む 周」と読み取れる。松枝の元に届いた消印は「福岡、(昭和) 18. 3. 27」と読み取れる。
- (26) 「爰居」とは『國語』「魯語」に見える巨大な海鳥の名前。周作人が書信で引くのは『爾雅』「卷十釋鳥第十七」の項からの抜粋。原典では以下のように記されている。「爰居雜縣・釋曰爰居海鳥也。大如馬駒、一名雜縣、漢元帝時、琅邪有之。注『國語』至爰居、釋曰云、『國語』曰海鳥爰居者、案『魯語』云、海鳥曰爰居、止於魯東門之外三日、臧文仲命國人祭之」とある。また、『莊子』では「昔者海鳥止於魯郊、魯侯御而觴之于廟、秦九韶以為樂、具太牢以為膳。鳥乃眩視憂悲、不敢食一鸞、不敢飲一杯、三日而死。此以己養養鳥也、非以鳥養養鳥也。唐成玄英疏・昔有海鳥、名曰爰居、形容極大、頭高八尺、避風而至、止魯東郊。」（『莊子』外篇至樂）とある。従って「魯養爰居」とは大きな海鳥たる「爰居」の性向を無視して死なせた愚行を指摘するものである。
- (27) 現存する電報は一通のみ。
- (28) 松枝茂夫が目撃したのは『論画四種』（坂崎坦編、岩波文庫一九三三年六月刊）所収の安西雲煙「鑿禪画適」と思われる。「商呂ノ爰居ヲ饗スル」は同書の一節「古今優劣」に見える言葉。
- (29) 周作人の母、魯氏の訃音（印刷物）。書信とは性格が異なるので（附録）に掲げる。孫玉蓉（『同声月刊』中的知堂作品）（『魯迅研究月刊』二〇〇一年十一月期）によると、この文章は『同声月刊』（第三卷三号、一九四三年五月）に『先母行述』と題して発表された（未見）。現在、『周作人集外集』（海南国際新聞出版中心、一九九五年九月）に収録されているが、誤植らしき文字の脱落が多数ある。
- (30) この手紙には日付が記されていないため、封筒の投函日の消印に基づいている。
- (31) この二十篇は漏れなく単行本に収められた。もとの十三篇がどれだったかは、該当の書信が失われているため不明。
- (32) タイプとは台風のことか。
- (33) 『欧米紀遊二万三千哩』（服部書店明治四一年刊）、『西詞余情』（佐久良書房明治四〇年刊）
- (34) 『榻』（佐藤紅緑著、服部書店明治四十一年刊）を指すものと思われるが、巻末広告そのものは確認できなかつた。
- (35) 『藥堂雜文』（北京新民印書館一九四四年一月刊）および『書房一角』（北京新民印書館一九四四年五月刊）のことを指すと思われる。
- (36) 『藥堂雜文』を指す。
- (37) 松枝茂夫自身の整理によると、前半部分（「覺得不能不一説、而讀者乃亦有以爲」まで）を一九四〇年六月三〇日の書信とし、後半部分を一九四四年五月分としていたが、明らかに一貫する内容なので、併せて一通とした。一枚目と二枚目との文のつながりも問題ないと考えるが、書信には通し番号がないため、途中散逸した書信がないとは言えない。いずれにせよ、書簡の執筆時期は、『結縁豆』の刊行時期（生活社一九四四年四月十五日刊行）と『書房一角』の刊行時期（新民印書館一九四四年五月二五日印刷、三〇日発行）の間である。

(38) ここでの「文學報國會」とは明らかに一九四三年八月に片岡鉄兵が「第二回大東亜文学者大会」で行った周作人批判のことを指す。従って「前年」を字義通りに解釈すると、この手紙は一九四五年五月に書かれたものと判断せねばならないが、先の注記で記した通り、一九四四年に執筆された事は疑う余地がない。ここでの「前年」とは、恐らく日本人の松枝向けに「前の年」の意味で書いた表現だろう。

(39) 「児女英雄伝の面白さ」(『文学研究』三四輯、九州大学法文学部一九四四年)を指す。『中国文学の楽しみ』(岩波書店一九九八年刊)に収める。

(40) 周作人「馬跡寺」文中で引用する『寶慶會稽續志』卷四「橋梁門下」のことを略して述べるもの。

## 〔附録〕

## 先母事略

先母魯氏，諱瑞，爲外祖父咸豐辛亥科舉人戶部主事魯晴軒公希曾之三女，生於咸豐七年丁巳十一月十九日。光緒六年歸於我。先君伯宜公，生子四，樟壽、樾壽、松壽、椿壽，女一，端姑，幼癆。先君爲會稽縣學生員，屢應鄉試中式，以酒自遣，久之遂病咯血，繼患水腫，臥病三年，先母竭力調護，形神爲之銷損，終不起，於光緒丙申九月去世。先君讀儒書，而感念時艱，思欲有所作爲，乃卒不得志，日者嘗評之曰，性高於天，命薄如紙。居間嘗言，吾有子四人，當遣其出海外求學，一往西洋，一往東洋耳。先母聞而識之。及先君歿，家計益窘，先母乃遣樟壽往南京，易名樹人，考入江南陸師學堂附設鑛路學堂，時人尙迷戀科舉，多以改途爲非，相率阻止，先母弗聽焉。戊戌冬四弟椿壽以急性肺炎卒，年六歲，先母痛之甚，令畫師追寫其像，懸之室中，今存作人處。庚子變後一年辛丑，令樾壽往考江南水師學堂，易名作人，入管輪班，丙午奉派往日本留學，時樹人亦已先在，至庚戌辛亥始相繼歸國。蓋自丁酉至辛亥十餘年中，樹人作人均游學在外，在南京時尙得乘年假時一歸省，及往東京則六年內未曾一歸，先母唯與松壽即建人居守老屋。民國建立，樹人供職南京教育部，旋移往北京，六年作人被聘爲北京大學教授，八年冬先母遂率家人北遷，定居北京，以至於今。先母性弘毅有定識，待人寬厚，見有急難

恒不惜自損以濟人，以是爲戚邨所稱。平時唯以讀書自遣，古今說部無所不讀，又喜閱報章，定大小新聞數種讀之，見所記多單調虛假，輒致憤慨，關心時世安危，時與兒輩談論，深以不能再見太平爲恨。近年目力稍減，不便讀報紙細字，始輟讀，改而編織，嘗臥疾而兩手編物如故，勸止之，則曰，我以此消遣，不爲疲也。先母氣體素強，未嘗患重病，今年二月因肺炎轉而爲心臟衰弱，勢甚危殆，以笹間醫師之力，始轉危爲安。作人蒙 國民政府選任爲委員，當赴首都謁 主席，見 先母飲食如常，乃稟命出發，及半月後自南京返，則肺炎復發，據醫師言病本不劇，而年老氣虛，慮不能勝。 先母見作人歸，即曰，這回與汝永別了，複述兩次，作人深訝其語之不祥，而不圖其竟實現於五日之內也。時爲四月十八日，至二十二日酉時乃遂長逝，享壽八十七歲。臨終之日神志清明，不訴苦痛，不見穢惡，漸以入滅，如就安眠，世所謂得大往生者非耶。作人不能爲文，猝遭大故，心緒紛亂，但就記憶所及，略記數行，凡爲人子者皆欲不死其親，作人之力何能及此，但得當世仁人，讀其文而哀其心，則作人之願爲不虛矣。 次男周作人泣述。

## 〔追記〕

『中国現代文学研究叢刊』二〇〇七年第四期に「周作人与松枝茂夫通信（一九三六—一九四二）」が掲載された。小川は解題として、「关于周作人与松枝茂夫通信的说明」を寄稿している。この資料は、小川が撮影した書簡のデジタル画像に基づき、周作人遺族の手で整理校訂し直したもので、周作人書簡及び周作人が添削した質疑応答部分のみが収録され、松枝茂夫の日本語書簡部分は省かれている。この経緯から、文字校訂については今号より『中国現代文学研究叢刊』二〇〇七年第五期分（一九四三年—一九五六年）も参照したものの、文字の不一致は残っている。ご諒解を乞いたい。